
星のクジラ

雨澤エミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星のクジラ

【Nコード】

N3764Z

【作者名】

雨澤エミ

【あらすじ】

い
小さな村に住む、僕とトオルが体験した、ちょっと不思議な出会い

人生には、これを言ったら、怒るだろうなとか、悲しむだろうなとか、そういう言葉を言わなきゃいけない時もある。そんな大きなことじゃなくなつて、そういう場面が幾つもあった、それでもやっぱり、勇気が出なくなつて言うのを躊躇う。かといって言わないでよくと、ますます氣まずいことになる。

今の僕みたいに。

「なあ今年の祭さ、カエデが選ばれたのかよ」

さらにと、トオルに言われた。

僕は、すぐくビツクリしてしばらく声がでなかった。

「それ、どこで聴いたの…？」

「ああ、さっき学年主任に言われたんだよ。『宮下、残念だったなあ』とかなんとかって、うっぜえの」

大宮先生か。僕はあの先生の、巨大な熊のような体と笑顔が張り付いた顔を思い出す。確かにあの先生なら言い兼ねない。親切で言っている言葉が地雷を踏んでいることに気がつかない、やっかいなタイプの人だ。

「それで、どうなんだよ」

トオルは、僕に鋭い眼光を投げつける。

僕は、少し氣後れして「うん」と言う事だけで精一杯だった。

「そうか」

「あ、トオル。ごめんね、黙ってるつもりじゃなかったんだけど。なかなか言い出せなくてさ」

カエデは、しばらく黙ったままカエデは喋ろうとしない。

やばい、めっちゃめっちゃ氣まずい。

「いや、怒ってねえよ」

あまりの沈黙のあと、聴こえてきた言葉にはあまり説得力がなか

った。

「ほ、ほんとに？」

「しつけない、本当だよ」

黙っていたことにプラスして、トオルは祭に選ばれることを楽しみにしていた（まあ、それが黙っていた理由でもあるんだけど）。そう簡単に腹の虫が収まるとは思えない。

びくびくとトオルの方を伺う。

そんな僕をちらりと見て、トオルはにやりと笑みを浮かべた。あれ、なんだかとてもイヤな予感がある。

その笑みには見覚えがあった。

面白いイタズラを思いついた時の顔だ。

僕が初めてその顔を見たのは、小学一年の夏休み前のことだ。学校にも慣れて来て、つい遊び過ぎて帰宅が遅くなった僕たちは、学校で怖いと言われている先生に見つかり、案の定こっぴどく叱られ、とぼとぼと帰り道を歩いていた。

二人共、押し黙ったまま田んぼの中を歩いていた。

昼過ぎの日差しが、じりじりと首の後ろを照らし、首が熱くなっていたのを覚えている。

「…きょうは、おどろいたよね」

重々しい空気を変えようと、僕は口を開いた。今思えば「ただ怒られただけ」それだけのことだったけど、小学一年生だった僕たちには、それだけでもショックな出来事だった。少なくとも僕にとっては。

「…さねえ」

しばらく黙ったまま後ろを付いて来ていたトオルが、ぼそりと呟いた。

「はい？」

「ゆるさなねえ、あいつ」

「…えっと」

僕は、この時まで、トオルは反省してしおらしく黙っているのだと思っていたんだ。

「びっくりさせてやるんだよ。みてろよ、ぜったいぎゃふんといわせてやる」

今時、ぎゃふんなんて言葉、あんまり聴かないよな、と思いつつ覗き込んだトオルの顔には、ニヤリとした笑顔が浮かんでいた。

イタズラ作戦自体は、「大量のカエルを捕まえて先生の前で離す」

とかそんな、どうしようも無いもので（しかも、カエルを探すのに飽きたトオルに、僕は沼に落とされた）。作戦自体も結局失敗に終わった。

トオルとは、この分校に入ってから仲良くなった訳だけれども、この時初めて「トオル」という人間を理解した気がする。

他にも、小学3年生の時には鉄棒は歩けるんだぜと同じ顔をして笑っていた。案の定、滑り落ちて大けがをして。先生を呼びに行ったら僕が何故か一番、こっぴどく怒られた。

とにかく後先考えず、感情だけで突っ走る奴なんだ。
だから、今回も悪い予感しかしなかった訳なんだ。

「え、勝負…?」

帰路には、いつもの田んぼ道が広がっている。

辺りを見回すと、本当に何も無い村だなんて思う。僕の家までは、3キロぐらい。僕の家以外何もないような山の中だ。途中に、トオルの家を含んだ集落がある。それから、数百メートル行ったところに小さな駄菓子屋があって、たまに2人で寄り道したりする。

それ以外は、特になんの遊び場もない。遊ぶことと言ったら、山の中で虫を採ったり、空き地で、みんなで鬼ごっこしたりだ。

あとは、高学年になってからは、五時ぐらいまでは学校の遊具で放課後遊べるようになる。大きくなるってことは、できることが増えるってことなのだな、なんてちよっただけ思った。

「そう、俺とお前で、勝負して勝った方が祭に出られるってのどうだ」

どうだ、と言われましても。

「…でもさ、もう決まったことなんだよ。それに祭の掟にも『選ばれたら、謹んで受けるべし』って書いてあるし、断るなんて…」

「なんだよカエデ。『トオルに出て欲しい。応援しているから』って言ってくれたのは嘘だった訳」

「…そ、それはさあ」

痛いところをつかれた。僕は、元々祭りに出るとか、そういうことは苦手なんだ。どう考えてもそういうことに向いているのは、トオルで。それは周りの大人たちだって分かってるはずだ、なんて甘く考えていた。

きつと大人たちが考えていたのは、逆のことなんだろうなっと思う。

多分それは、トオルだって分かってるんだ。それでも納得できない。

「つーかさ、1回だけの祭の選出だぜ。お互いにしこりが無いように、戦って勝ち取るもんだろ。まあ、もし俺が勝ったらお前が病気で寝込めばいいさ」

「なにを言ってるんだよ」

しこりがないように、大人たちが選出しているはずなんだけれどね。何を言っても今は通じないだろうな。

それに、今なら分かるんだ。トオルの気持ち。苦手だとはいえ、あの役に選ばれた時すごく嬉しかった。心のどこかで誇らしい気持ちにもなった。ずっと、それに憧れてたのなら尚更、そう思うんだろうなって。

だから、巻き込まれようと思った。

「それで、なんの勝負をするの？」

「き、も、だ、め、し」

トオルは、楽しそうに笑う。

ああ、でもやっぱりロクなことになりそうにない。

僕たちの住んでいる、星川村には、毎年秋に、村北部にある山に登った先にある星の湖に神輿を担いで行き、星の祠に供物を捧げて湖の水神に祈りを捧げる祭がある。山をひとつ登ることや、夜から祭を始めることから、村の成人しか参加を許されていない。

だから、村の子供たちは、その日学校に集まって宿泊訓練をすることになっている。

それはそれで楽しいのだけれど、小学6年生になると別の役目を与えられる。毎年、一人だけ神輿の上に乗る、祠の神様へ捧げられる人身御供の「役」を与えられるのだ。つまり、その日、選ばれた子だけは大人と共に祭に参加できるのだ。これは小学6年生だけに与えられた任務な訳だけれど、たまに例外がある。その年に小学6年生がいない場合だ。その場合、繰り上がって5年生が任に当たる場合がある。（5年生が居ない場合は中学一年に回ってくる）

どちらにしろ、毎年1人にしか与えられない貴重な役だ。

僕たちの代は、上にも下にも子供は居て、しかも同じ歳の子供は僕とトオル二人だけだった。だから、小学校入学してから急速に仲良くなった訳だけど、それと同時に、お互いをライバルとして無意識にも意識していたんだろうなと思う。

僕だって、言葉ではトオルを応援しているって言っておきながら、そういうことなんか苦手なんだって思いながら選ばれたってやっぱり思っていた。

それは歴代の役の人たちがかっこ良かったから。ただ、衣装を着て、神輿の上に座るだけなのに、とてもかっこ良く映った。

それは、彼らがというより、神輿と彼らが着る衣装にデザインされている鯨神がとても雄大で神秘的だったからかもしれない。

そう、なぜか星の祠が祭っている水神は鯨だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3764z/>

星のクジラ

2011年12月19日14時48分発行